

『天草版平家物語』考（４）

市 井 外喜子

A Study of “Amakusaban-Heike-Monogatari”（４）

Tokiko Ichii

I はじめに

古典平家物語（『平家物語』諸本の代表として、国会本：新潮日本古典集成『平家物語』水原一校注）と、天草版平家物語（『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘著 明治書院）との構成比較を試みたい。

これまでに四度このような意図のもとに、報告を行なってきた。

最初は『天草版平家物語』考、大東文化大学紀要 人文科学 第38号 平成12年3月のものがある。天草版平家物語巻第一（全12章段）の構成を、古典平家（代表として岩波書店刊 新日本古典文学大系『平家物語』梶原正昭・山下宏明校注：高野本）巻第一～巻第三と比較し、その構成上の特徴を報告した。

続いて、自著『天草版平家物語私考』（新典社 平成12年12月）では、天草版平家物語巻第一に、巻第二（全10章段）を加えて、古典平家（高野本：新日本古典文学大系『平家物語』、斯道文庫本：『百二十句本平家物語』汲古書院、国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第四・巻第五と比較を行ない、その構成上の特徴を報告した。

さらに『天草版平家物語』考（２）、大東文化大学紀要 人文科学 第40号 平成14年3月では、天草版平家物語巻第三（全13章段）の第一章段（木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと）のみをとりあげ、古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第六との構成比較を吟味し、その結果を報告した。

また、『天草版平家物語』考（３）、大東文化大学紀要 人文科学 第41号 平成15年3月では、天草版平家物語巻第三（全13章段）の構成を、古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第六～巻第八と比較し、その構成上の特徴を報告した。

今回は、天草版平家物語巻第四（全28章段、実質29章段）の構成を、古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第九～巻第十二と比較し、その構成上の特徴を報告したい。

巻第四（全28章段、実質29章段）の構成比較を行なう前に、巻第一・巻第二および巻第三の観察結果を簡潔に記しておきたい。

最初に巻第一・巻第二および巻第三の古典平家との対校表を示す。天草版平家物語巻第一は、古典平家巻第一から巻第三までとの対校表であり、巻第二は、古典平家巻第四・巻第五との対校表である。また巻第三は、古典平家巻第六から巻第八までとの対校表である。両平家の構成特徴が把握できるように、登載章段名の有無を明らかにした作表である。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも登載章段としてとりあげている。したがってこの対校表は、天草版平家と古典平家の構成特徴を端的に示すものといえる。

今回の報告、巻第四（全28章段、実質29章段）の観察においても、このような対校表を作成するところから始めることになる。

天草版平家巻第一（全12章段）と古典平家（巻第一～巻第三）との対校表は、以下のようになる。

天草版平家巻第一	古典平家（高野本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第 一	祇園精舎 殿上聞討 鱧 禿髪 吾身栄花	祇王	巻第一 天草版平家では巻第二・第一章段へ移行
第 二	殿下乗合	二代后	
第 三	鹿谷 俊寛沙汰 鶴川軍	額打論 清水寺炎上 東宮立	
		願立 御輿振 内裏炎上	
		座主流 一行阿闍梨之沙汰	巻第二
第 四	西光被斬 小教訓（前半）		
第 五	小教訓		
第 六	少将乞請 教訓状		
第 七	烽火之沙汰 大納言流罪		

第 八	阿古屋之松 大納言死去	徳大寺厳島詣 山門滅亡 堂衆合戦 山門滅亡 善光寺炎上	
第 九	康頼祝言（前半数行） 康頼祝言 卒都婆流 蘇武		
第 十	赦文 足摺 御産		卷第三
第十一		公卿揃 大塔建立 頼豪	
第十二	少将都帰 有王 僧都死去	颯 医師問答 無文 灯炉之沙汰 金渡 法印問答 大臣流罪 行隆之沙汰 法皇被流 城南之離宮	

天草版平家卷第二（全10章段）と古典平家（巻第四・巻第五）との対校表は、以下のようになる。

天草版平家 巻第二	古典平家（高野本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第 一	祇王		巻第一
第 二	颯之沙汰 信連 競（前半13行まで）	厳島御幸 環御 源氏揃	巻第四
第 三	競		
第 四	山門牒状 南都牒状		

第 五	永僉讓 大衆揃（前半）		
第 六	大衆揃 橋合戦（前半）		
第 七	橋合戦 宮御最期（前半）		
第 八	宮御最期 鵠	通乗之沙汰 三井寺炎上	
第 九	文学荒行 福原院宣 富士川（前半）	都遷 月見 物怪之沙汰 早馬 朝敵揃 咸陽宮 勸進帳 文学被流	卷第五
第 十	富士川 五節之沙汰 都帰	奈良炎上	

○ 高野本・期道文庫本・国会本との対校表

天草版平 家卷第二	古典平家		
	高野本	斯道文庫本	国会本
第 一	祇王	第 3 句 義王	第 5 句 義王
第 二	馳之沙汰 信連 競	第 4 句 義王出家 33句 信連合戦 34句 競	第 6 句 義王出家 第33句 信連合戦 第34句 競
第 三	競	34句 競	第34句 競
第 四	山門牒状 南都牒状 永僉讓 大衆揃	35句 牒状 36句 三井寺大衆揃	第35句 牒状 第36句 三井寺大衆揃ひ
第 五	大衆揃 橋合戦	37句 橋合戦	第37句 橋合戦
第 六	橋合戦 宮御最期	38句 頼政最期	第38句 頼政最期
第 七	宮御最期 若宮出家	39句 高倉宮最後	第39句 高倉の宮最後
第 八	鵠	40句 鵠	第40句 鵠

第 九	文学荒行 福原院宣 富士川	46句 文学 47句 平家関東下向	第46句 文学 第47句 平家関東下向 第48句 富士川
第 十	富士川 五節之沙汰 都帰	48句 富士川 49句 五節沙汰	第48句 富士川 第49句 五節の沙汰

天草版平家巻第三（全13章段）と古典平家（巻第六～巻第八）との対校表は、以下のようになる。

天草版平家巻第三	古典平家（国立国会図書館蔵本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第 一	第54句 義仲謀叛	第51句 高倉の院崩御 第52句 紅葉の巻 第53句 葵の女御 第55句 入道死去 第56句 祇園の女御 第57句 邦綱死去 第58句 須俣川 第59句 城の四郎頓死	巻第六
第 二	第61句 平家北国下向		巻第七
第 三	第62句 火打合戦		
第 四	第63句 木曾の願書		
第 五	第64句 実盛		
第 六	第65句 玄昉の沙汰		
第 七	第66句 義仲山門牒状		
第 八	第67句 平家の一門願書		
第 九	第68句 法皇鞍馬落ち		
第 十	第69句 維盛都落ち	第75句 頼朝院宣申	巻第八
第十一	第70句 平家一門都落ち		
第十二	第71句 四の宮即位		
第十三	第72句 宇佐詣で		
	第73句 緒環		
	第74句 柳が浦落ち		
	第76句 木曾猫間の対面		
	第77句 水島合戦		
	第78句 瀬尾最後		
	第79句 法住寺合戦		
	第80句 義経熱田の陣		

上記の対校表から天草版平家物語各巻に共通する観察諸点を、次の3点に絞ることができる。

①天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんではいない（古典平家の各章段と1対1の

関係を持っているわけではない)

③登載章段の内容（いくつかの章段が連続的に不登載）

④不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

これら③～④の観察点に立って『天草版平家物語』巻第一・巻第二および巻第三の構成・注目点の要旨を箇条書きとして記しておくことにする。

最初に巻第一の構成・注目点を記す。

1. 天草版平家には、古典平家（読み本系・語り本系ともに）の総序とも言うべき「祇園精舎」冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。」が削除されている。異教である仏教的な視点からではなく「をごりをきわめ、人をも人と思わぬようなるもの」としての清盛の「行儀の不法なことをのせたもの」として、『天草版平家物語』を語ろうとしている。

2. 巻第一の冒頭：平家の先祖の系図（祇園精舎・殿上闇討）、また忠盛の上のはまれ（殿上闇討・鱸）と、清盛の威勢栄華（禿髪・吾身栄花）のことには、古典平家から5章段分をとりこんでいる。：③

3. 登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第一の構成が、明確に得られる。巻第一は、全体を3区分仕立てにしている。

・第1区分（第一章段のみ：A 平家一門の威勢繁栄）は、清盛の先祖歴代の大要を語り、忠盛昇殿から清盛をはじめとする平家一門の威勢繁栄を語る。

・第2区分（第二章段のみ：B 平家悪行の始め）は、摂政基房の車ともめ事を起こした清盛の孫、資盛をめぐる平家悪行の始めを語る。（殿下乗合）

・第3区分（第三章段～第十二章段までの10章段：C「鹿谷」事件）は、「鹿谷」事件を語る。（藤原成親等による平家打倒の策が失敗し、その顛末・後日譚まで）

・『天草版平家物語』を抄訳した日本人イルマン、不干ハビヤンの編纂姿勢が明白に窺われる。古典平家の各章段から万遍なく取り入れるのではなく、「殿下乗合」・「鹿谷」事件に焦点を絞り、他の内容は排除している。：④

4. 不登載章段の内容からは、直接平家の物語に拘わりを持たない古典平家の章段群が持つ内容が、浮かび上がってくる。それは清盛全盛期に現出した歴史的な大事件群（一連の山門騒動など）である。『天草版平家物語』ではこれらの事件を割愛したために、古典平家にみられるような混乱・不統一がない。天草版平家では、「鹿谷」事件の連続性が保たれ、主要人物の大納言、法勝寺執行俊寛らの像が、鮮明に結ばれる。：⑤

・このことは外国人宣教師の日本語テキスト『天草版平家物語』に一貫性を与え、内容把握を容易にする利点も兼ね備えることになる。

5. 「祇王」章段の移行（高野本では「吾身栄花」に続く「祇王」章段が、天草版平家では巻第

二第一章段へ移行)が、注目される。

続いて巻第二の構成・注目点を記す。

1. 登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第二の構成が、明確に得られる。巻第二は、全体を3区分仕立てにしている。

・第1区分(第一章段のみ:D「祇王」章段)は、不干ハビヤンの意図的な配置によって、巻第二冒頭に置かれたものである。清盛の「fuxiguina cotoのみをせられてござる」とする結末を語る。

・第2区分(第二章段～第八章段:E「高倉宮以仁王」の事件)は、高倉宮以仁王が、源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の顛末を語る。

・清盛に対する私憤から出家する祇王:宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましひに私には企られず、宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政、この親子(清盛・宗盛)の「fuxiguina coto」が、平家衰亡の前兆となることを語るのが、祇王・高倉宮以仁王の事件の主題目である。

・第3区分(第九・第十の2章段:F「源頼朝」の挙兵)は、源頼朝の挙兵から、富士川における源平両軍の合戦と平家軍の敗北、近江の国へ発行までが語られる。

・巻第一の最終末尾には、平家衰亡の因を、巻第二の最終末尾には、平家衰亡の前兆を語りおえている。:⑥

2. 古典平家から、天草版平家への不登載章段の内容を示す。不登載章段をみることによって、『天草版平家物語』巻第二の性格が理解できる。

①厳島御幸:還御・源氏揃・通乗之沙汰・三井寺炎上:「高倉宮」事件に直接拘わりを持たない章段。

②都遷・月見・物怪之沙汰(都遷群):清盛が福原遷都を断行したことを主題として、それに拘わる貴族の郷愁・様々な怪異など。

③早馬・朝敵揃・咸陽宮(早馬群):頼朝の挙兵に関連して語られる説話。

④勧進帳・文学被流(文学群):文学像を語る説話等。

⑤奈良炎上:平氏一興福寺・東大寺との抗争を語る「奈良炎上」は、「三井寺炎上」(平氏一園城寺の抗争)と同じく不登載章段。巻第一で「清水寺炎上」・「善光寺炎上」が排除されているのと同様である。:⑦

3. 天草版平家巻第二の依拠本を注目するために作成したのが、2つの対校表である。「高野本」(覚一本)に比して、百二十句本の「斯道文庫本」(漢字・片仮名交り本)・「国会本」(平仮名本)との関連性の深さは、一目瞭然である。

さらに巻第三の構成・注目点を記す。

1. 登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第三の構成が、明確に得られる。巻第三は、全体を3区分仕立てにしている。

- ・第1区分（第一章段～第五章段）は、主として木曾義仲の動向（挙兵・侵攻・勝利等）を語る。第1区分の義仲は、武人としての成果をあげ、肯定的な側面が語られる。
- ・第2区分（第六章段～第十章段）は、主として平家一門の動向（平家一門都落ちの決意をし、九州に下ったが、そこにも居られず屋島に仮の内裏を営むこと等）を語る。
- ・第3区分（第十一章段～第十三章段）は、再び木曾義仲が登場し、その動向を語る。第3区分の義仲は、否定的な側面をみせる。「義仲悪行」にみられる木曾は、終に院の御所まで焼いてしまう。
- ・巻第三の主題は、次の2点である。

G 木曾義仲の動向（第1区分・第3区分）

H 平家一門の動向（第2区分）

2. 古典平家から天草版平家へ持ちこまれなかったものの大部分が、第一章段にある。第一章段の不登載章段について記す。

国会本巻第六冒頭第51句高倉の院崩御に続き、第52句紅葉の巻 第53句葵の女御：高倉院追悼説話群を省略

第55句入道死去 第56句祇園の女御 第57句邦綱死去：清盛追悼説話群を省略

古典平家にとって重要な位置を占める「入道死去」をすべて割愛し、義仲の旗挙げから横田河原合戦での大勝まで徹底した改編が行なわれている。

第58句須俣川の割愛も注目される。第60句において横田河原合戦が省筆されずに天草版平家にとりこまれているのとは、対照的である。

・不登載章段の夥しい量・質は、木曾義仲と直接拘わりを持たないものとして排除した結果である。

3. 不干ハビヤンによる古典平家から天草版平家への内容の組替えは所所にみられるが、改編による構成において最も威力を発揮するのが巻第三第一章段および第十三章段である。

・巻第三の冒頭第一章段を、義仲謀叛をもって飾る大胆な手法は、巻第三の主題を明確に打ち出し、巻第三を象徴するものと言える。

・最終章段第十三章段が国会本から「義仲悪行」のみを終末部にとりこみ、第十三章段を終えるという構成の組替えは、巻第四第一章段への新たな展開を呼びこむための改編である。

『天草版平家物語』巻第三は、編纂者不干ハビヤンの大胆さ、緻密さに裏付けられた構成により成り立つものと言える。

II 天草版平家物語巻第四の構成

これまで天草版平家物語巻第一・巻第二および巻第三の構成特徴を簡潔に述べてきた。

今回の巻第四の構成を述べるに際しても、巻第一・巻第二および巻第三の比較手順と同じく古典平家との対校表を作成し、その観察を行なうことによって、巻第四の構成特徴を見ることにす

る。なお巻第二の構成特徴を見た際に、「高野本（覚一本）」に比して、百二十句本「斯道文庫本」・「国会本」との関連性の深さを明示し、巻第三の古典平家との対校表は、「国会本」に依ることにした。（斯道文庫本は、巻第八が欠本である。）巻第四の古典平家との対校表も、「国会本」に依ることにする。

（１） 古典平家との対校表

対校表を示す前に、天草版平家物語巻第四（全28章段、実質29章段）の表題を載せることにする。

第一 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしょうとつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと

第二 範頼、義経木曾が討手に上らるること：同じく梶原にわ摺墨、佐々木にわ生食とゆう馬を下されたこと：並びにかれら宇治川の先陣を争うたこと

第三 義経兵どもに敵をば防がせて、その身わ院の御所え参って、御所を守護せられたこと

第四 木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと

第五 樋口の次郎、降参して後に切らるること：同じく茅野が討死のこと

第六 源平大手、搦手の大将を分けられて、義経わ三草の合戦にうち勝って、また鴨越えかかられたこと

第七 熊谷と、平山と一の谷え押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと

第八 大手生田の森の合戦のこと：同じく鴨越を落され、越中の前司が討死のこと

第九 平家の一門の人々多う討たれたその中に、敦盛熊谷に会うて討死のこと

第十 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと

第十 都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰

第十一 重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと

第十二 重衡のあづま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰

第十三 小松の三位の中将屋島を出て高野え上らるること：同じく滝口、横笛がこと

第十四 三位の中将の受戒、重景石童丸がこと、同じく三位の中将身を投げられたこと

第十五 池の大納言関東え下られたこと：また三位の中将の北の方のこと

第十六 義経と梶原逆櫓の論：同じく屋島え渡って内裏を焼き払い、軍せらるるに、嗣信義経の身代りに立って死んだこと

第十七 那須の与一が扇を射たこと：また義経弓を取り返されたこと

第十八 義経教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと

第十九 平家の生け捕り都え入って渡さるること：同じく建礼門院のこと

- 第二十 大臣殿を子副将に對面あること：同じく副将を害すること
- 第二十一 大臣殿の東下り，同じく帰洛の道でくびをはねられ，京中を渡されたこと
- 第二十二 地震のこと，また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと
- 第二十三 平大納言の配所にをもむかるること：並びに建礼門院の大原え御隠居のこと
- 第二十四 昌尊が夜討ちのこと，また頼朝と，範頼不快のこと
- 第二十五 義経の都を落ちられたこと：並びに北条の上洛のこと
- 第二十六 六代を北条召しとってのち，文覚わびことによって頼朝赦免せられたこと
- 第二十七 法皇大原に御幸なされ，女院に御見参あったこと
- 第二十八 六代高野え上らるる事と，平家断絶，また文覚も流され，ついにわ六代も首をはねられたこと

さて以下に示すのが天草版平家卷第四（全28章段，実質29章段）と，古典平家（国会本：巻第九～巻第十二）との対校表である。この対校表は両平家物語の構成特徴の把握が容易なように，登載章段名の有無を明らかにした作表である。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも，登載章段としてとりあげた。

天草版平家物語卷第四（全28章段，実質29章段）と，古典平家（巻第九～巻第十二，巻第八第80句を含む）との対校表は，次のようになる。

この対校表をもとにして，天草版平家と古典平家（国会本）との構成をみることにする。

天草版平家卷第四	古典平家（国立国会図書館蔵本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第 一	第80句義経熱田の陣		巻第八
第 二	第81句宇治川		巻第九
第 三	第82句義経院参		
第 四	第83句兼平		
第 五	兼平		
第 六	第84句六箇度のいくさ		
	第85句三草山		
第 七	第86句熊谷・平山一二の駆		
第 八	第87句梶原二度の駆		
	第88句鶴越		
第 九	第89句一の谷		
第 十	第90句小宰相身投ぐる事		
第 十	第91句平家の一門首渡さるる事		巻第十
第十一	第92句屋島院宣		
	第93句重衡受戒		
第十二	第94句重衡東下り		
第十三	第95句横笛		
	第96句高野の巻		

第十四	第97句維盛出家		
	第98句維盛入水		
第十五	第99句池の大納言関東下り		
	第100句藤戸		
第十六	第101句屋島		卷第十一
第十七	第102句扇の的		
第十八	第103句讒言梶原		
	第104句壇の浦		
	第105句早鞆		
第十九	第106句平家一門大路渡し	第107句剣の巻上 第108句剣の巻下	
第二十	第109句鏡の沙汰		
	第110句副将		
第二十一	第111句大臣殿最後		卷第十二
	第112句重衡の最後		
第二十二	第113句大地震		
第二十三	第114句腰越		
	第115句時忠能登下り		
第二十四	第116句堀川夜討		
第二十五	第117句義経都落ち		
第二十六	第118句六代		
第二十七	第119句大原御幸		
第二十八	第120句断絶平家		

さらに登載句の記述内容の登載有無を国会本の小題目（小見出し）にしたがって示してみると、
以下ようになる。

	登載小題目	不登載小題目	天草版平家卷第四
第80句	義仲悪行		卷第三 第十三
義経熱田の陣	公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事		第一
第81句 宇治川	京・屋島迎年 今井の四郎瀬田を警固する事 仁科・高梨宇治川を警固する事 佐々木の四郎生唆賜はる事 佐々木・梶原生唆の輪 範頼・義経京に迫る 宇治川先陣争ひ 大串の重親歩立ちの先陣の事 宇治・瀬田合戦の次第		第二

第82句 義経院参	義仲優女暇乞ひの事 越後の中太家光自害の事 義経禁廷言上 義経内裏を守護申さるる事		第三
第83句 兼平	河原合戦 義仲都落ち 浜いくさ 巴のいくさ 義仲最後 兼平最後		第四
	樋口の次郎帰洛 茅野の太郎光弘討死 樋口の次郎降人 樋口斬られ	摂政還任 義仲敗亡の論	第五
第84句 六箇度のいくさ	平家一の谷の城郭 備前の国下津井のいくさ 淡路福良のいくさ 安芸の国沼田の城のいくさ	西の宮のいくさ 和泉の国吹飯の浦のいくさ 備前の国今来の城のいくさ 福原除目	第六
第85句 三草山	蒲の御曹司大手の大將の事 義経搦手の大將の事 三草山夜討 平家諸方警固 通盛北の方と名残を惜しむ 鴨越に向かはるる事 鷲の尾案内者の事		
第86句 一二の駆 熊谷・平山	熊谷父子・平山拔駆け 熊谷名のる事 平山駆け入る事 熊谷駆け入る事 熊谷・平山同心合戦の事		第七
第87句 の梶原二度	一の谷矢合せの事 河原兄弟討死 梶原平次景高が歌の沙汰 景時・景季同心の事		第八
第88句 鴨越	大鹿二つ落つる事 鞍置馬二匹落さるる事 義経落し給ふ事 平家の屋形炎上 能登守逃れ給ふ事 通盛討死		

	越中の前司最後		
第89句 一の谷	忠度最後 重衡生捕り 敦盛最後 熊谷発心 熊谷牒状 経盛返牒	後藤兵衛後日 師盛討死 経正・経俊・清房・清定・業盛討死 知章最後 河越黒の沙汰	第九
第90句 事 小宰相身投ぐる	平家海上に浮かばるる事 首実検の事 小宰相愁嘆 小宰相身を投ぐる事 御乳母の女房髪剃る事	通盛夫婦の歌の沙汰	第十
第91句 渡さるる事 平家の一門首	卿相の首大路を渡すや否やの事 斎藤五・斎藤六首ども見奉る事 三位の中將述懐 三位の中將の文		第十 (誤記)
第92句 屋島院宣	重衡大路を渡す事 三種の神器所望の事 院宣 平家院宣の御返事		第十一
第93句 重衡受戒	重衡出家許されざる事 法然上人授戒 硯松蔭法然上人に奉らるる事 重衡大内女房玉づき 重衡と女房と参会の事		
第94句 重衡東下り	重衡東下り 池田の宿熊野あるじ歌 重衡鎌倉入り 頼朝と重衡と対面 千手の前湯殿へ参る事 千手・重衡遊宴 頼朝・親能物語り		第十二
第95句 横笛	維盛屋島出でらるる事 滝口発心 横笛悲恋 横笛死去 滝口高野の籠居		第十三
第96句	滝口入道対談の事		

高野の巻	高野の縁起	維盛高野参詣 延喜の帝御衣を高野に送らるる事 大師帝の御返事	
第97句 維盛出家	維盛出家 重景・石童丸出家 維盛武里に遺言の事 維盛粉河参詣 維盛湯浅に行逢はるる事 重盛熊野参詣の沙汰		第十四
第98句 維盛入水	維盛熊野参詣 維盛入水 与三兵衛・石童丸入水 武里愁嘆	那智籠りの僧、維盛見知り奉る事 維盛卒都婆の銘	
第99句 関東下りの池の大納言	弥平兵衛宗清述懐 頼朝と池殿と参会 維盛北の方愁嘆 新帝即位	崇徳院神廟	第十五
第100句 藤戸	佐々木三郎先陣の事	源氏室山の陣 平家児島の陣 佐々木三郎瀬踏み 都に大嘗会行はるる事	
第101句 屋島	渡辺・福島船ぞろへ 逆櫓の論 義経四国渡り 勝浦の陣 大坂越 屋島の城落去 言葉だたかひ 嗣信最後		第十六
第102句 扇の的	扇射手の論 与市扇を射る 与市二の矢の高名 水尾谷のいくさ 弓流し	牟礼・高松の陣	第十七
第103句 讒言梶原	伊勢の三郎義盛、教能を生捕る事 田辺の湛増源氏に参る事 蒲の冠者と九郎判官と一つになる事 判官・梶原口論	住吉鎭の奏聞の事	第十八
第104句 浦壇の	知盛いくさ下知	梶原船いくさ 遠矢の沙汰	

		源氏の船の中に白旗きたる事 晴延陰陽師ことわざの事	
	阿波民部心がはり		
第105句 早 輅	先帝・二位殿御最後 建礼門院捕はれ 大臣殿生捕らるる事 飛驒の三郎左衛門の事 能登殿最後 知盛入水 生捕の人々		
第106句 平家一門 大路渡し	西国より早馬 明石の浦の嘆き 生捕の衆都入り 牛飼三郎丸の事 大臣殿悲哀 平大納言の婿義経の事 女院出家	宝剣神鏡始末 二の宮御迎へ 頼朝二位に除せらるる事	第十九
第109句 鏡の 沙汰	 頼朝義経不快	天の岩戸の事 紀伊の国日前像の起り 内侍所炎上のがれ給ふ事 神楽弓立の宮人 二見の浦の鏡 神璽の沙汰	第二十
第110句 副 将	大臣殿副将見参の事 大臣殿関東下向 副将斬らるる事 乳母の女房身投ぐる事		
第111句 大臣殿 最後	大臣殿父子関東下向 関東たたるる事 上人の説法 大臣殿最後 右衛門督最後 大臣殿父子首渡し		第二十一
第112句 重衡の 最後	重衡南都へ渡さるる事 重衡最後	北の方参会 同じく離別の事 重衡処刑僉議 阿弥陀供養 北の方出家	
第113句 震 大 地	九重の塔たはるる事 天文の博士占ふ事		第二十二

		文徳の御時の地震 朱雀の御時の地震	
	建礼門院吉田の住まい		
第114句 腰越	九郎判官伊予守になる事 源氏あまた受領の事 梶原議訴	申し状	第二十三
第115句 時忠能登下り	平家生捕流罪の事 時忠女院に暇乞ひ 時忠異名 時忠能登下り 建礼門院大原寂光院隠居	頼朝文覚招請 義朝菩提院建立の事	
第116句 堀川夜討	土佐房上洛 堀川夜討 土佐房最後 三河守範頼義経討手の事 範頼最後 義経諸方頼まるる事		第二十四
第117句 義経都落ち	義経御下文申し請けらるる事 義経都落ち 同じく吉野の奥に赴かるる事 同じく奥州へ下らるる事 北条時政上洛 十郎蔵人討手の事	吉田大納言経房 三郎先生討手の事	第二十五
第118句 六代	北条六代を生捕る事 斎藤五・斎藤六 文覚六波羅へ参らるる事 六代関東下向 乞ひ請け六代 六代御前大覚寺へ参らるる事 六代高雄入り		第二十六
第119句 大原御幸	大原御幸 寂光院のたたずまひ 仏間御寝所のしつらひ 法皇女院と御参会の事 六道問答 龍宮城の夢見 法皇還御 女院死去		第二十七
第120句 平家断絶	六代出家 平家の方人誅せらるる事 伊賀大夫誅戮		第二十八

丹後侍従誅戮 土佐守宗実干死 越中次郎兵衛誅戮 文覚謀叛 頼朝死去 文覚流罪 六代誅戮		
--	--	--

上記の対校表から観察される天草版平家巻第四は、質・量ともに他の巻とは異なり、古典平家（国会本）から持ちこんでいる内容が多く見られる。しかし巻第四（全28章段、実質29章段）の構成上の柱となる主題は、次の2点となる。

I 義仲・義経の敗北への過程

J 平家断絶への過程（重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向）

したがって天草版平家巻第四は、「国会本」巻第八（第80句）から巻第十二（第120句）までを集約したものといえる。

（2）対校表の観察

前回までの対校表観察の視点にあわせ、巻第四においても次の3点から観察を行なうことにする。

①天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんでいない（古典平家の各章段と1対1の関係を持っているわけではない）

②登載章段の内容

③不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

これら①～③の3観察点について述べてみたい。まず①の観察から行なうことにする。

①天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんでいない（古典平家の各章段と1対1の関係を持っているわけではない）

対校表をみると、天草版平家の一つの章段内に、古典平家から最も多くの登載章段をとりこんでいるのが第十八（義盛教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと）である。国会本から3章段分の内容をとりこんで、天草版平家の一章段（第十八）をなしている。この天草版平家巻第四・第十八章段を例としてとりあげ、古典平家から天草版平家への抄訳（古典平家の各章段と1対1の関係を持っているわけではない）の様子をみる。

さて第十八章段の、聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と、話し手の喜一検校（Q1）の語り出し、その後の展開は次のようになる。

VM. その阿波の民部が子の教能わ何となったぞ？

Q1. そのをことぢや：義経義盛を召して、教能わ伊予の国え越えたが、ここに軍があると聞いて、今日わさだめて馳せ向わうず：大勢入れたててわかなうまい、汝行きむかうて、よいやうにこしらえて参れと、仰せらるれば：

と語り始める内容は、国会本第103句讒言梶原冒頭小題目、伊勢の三郎義盛、教能を生捕る事に相当する。続いて小題目 田辺の湛増源氏に参る事が語られる。しかし、住吉鐔の奏聞の事は、直接拘わりを持たないものとして割愛されるが、続いて 蒲の冠者と九郎判官と一つになる事判官・梶原口論が語られ、第103句が語りおさめられる。

次には第104句壇の浦の内容が続くはずであるが、この句は省筆が著しく以下の100字にも満たない内容が述べられるだけである。

さうして合戦が始まれば、はじめわ平家そつと勝色にあったれども、阿波の民部心変りをして平家の手だてを源氏え返り忠したによって、賭がはづれて、またさんざんに平家わ為負けたれば；

第104句壇の浦の小題目（梶原船いくさ 知盛いくさ下知 遠矢の沙汰 源氏の船の中に白旗きたる事 晴延陰陽師ことわざの事 阿波の民部心がはり）の大部分が、割愛されている。

さらに続けてQ1. が語るのは、第105句早鞆である。小題目にしたがって、先帝・二位殿御最後 建礼門院捕はれ 大臣殿生捕らるる事 飛驒の三郎左衛門の事 能登殿最後 知盛入水 生捕の人々のすべてをとりこんで第十八章段を語りおえる。

天草版平家第十八章段を要約すると、梶原景時の義経批判、阿波民部の源氏への心変り、壇の浦の攻防となる。平家滅亡への過程を語る章段であり、次の第十九章段平家の生け捕り都え入って渡さること：同じく建礼門院のことを語る前章段としての内容を持つものといえる。

この第十八章段で注目される一つに、省筆の技がある。第十八章段は国会本からは第103句讒言梶原・第104句壇の浦・第105句早鞆の3句の内容をとりこんでいるが、3句それぞれのとりこみ方をみせている。早鞆からはたつぷりと内容をとりこむのに比して、壇の浦からは、阿波の民部心がはりを積極的にとりこむだけである。3句の比重のおき方、特に第104句壇の浦にみられる省筆の妙が注目される。

前述のように巻第四は、他の巻に比して量質ともにその大きさが注目されるが、内容のとりこみ方、その比重のおき方が注目される。省筆の妙をみせる二・三の章段をみておきたい。国会本からとりこむ内容採択と省筆の摘要を注目したい。

最初に第十五章段（池の大納言関東え下られたこと：また三位の中将の北の方のこと）の省筆の様子をみる。

第十五章段は、国会本からは第99句池の大納言関東下り、第100句藤戸の2句の内容をとりこんでいる。第99句池の大納言関東下りでは、冒頭小題目崇徳院神廟が割愛されるが、弥平兵衛宗清述懐 頼朝と池殿と参会 維盛北の方愁嘆 新帝即位等は、すべて語られる。ところが続く第100句藤戸では、5小題目（源氏室山の陣 平家児島の陣 佐々木三郎瀬踏み 佐々木三郎先陣

の事 都に大嘗会行はるる事)の中でとりいれられるのは、佐々木三郎先陣の事のみである。そのとりいれ方の省筆は第十五章段末に、このようにみられる。

さて藤戸とゆう所でまた合戦があつて、佐々木の三郎とゆう者が手柄をして、そこでも平家わうち負けて、みな屋島え渡られたと、申す。

次に第二十章段(大臣殿を子副将に對面あること：同じく副将を害すること)の省筆の様子をみる。

第二十章段は、国会本からは第109句鏡の沙汰、第110句副将の2句の内容をとりこんでいる。第109句鏡の沙汰では、天の岩戸の事 紀伊の国日前像の起り 内侍所炎上のがれ給ふ事 神楽弓立の宮人 二見の浦の鏡 神璽の沙汰と、冒頭から続くこれら6小題目すべてが割愛されている。第109でとりこまれるのは 頼朝義経不快のみである。

VM. さてさて義経わいかい手柄を召されたの？

Q1. そのをことぢゃ

とうけて、喜一檢校が語り始める第二十章段の冒頭=国会本第109句鏡の沙汰 頼朝義経不快は、次の通りである。

平家亡びてのち、国々も静まって、人の通いもわづらいなければ、義経ほどの人こそなけれ：頼朝わ何ごとをもさせられず：高名あれば、ただ義経の世であらうずると内々申すと聞こえたれば、頼朝これを伝え聞かせられて、これわいかなこと？ 頼朝が居ながら謀事をめぐらせばこそ、平家わ亡びたれ：義経ばかりでわ何として世をば始めうぞ？(後略)

このように頼朝義経不快の内容を冒頭にとりこみ、後には第110句副将(大臣殿副将見参の事 大臣殿関東下向 副将斬らるる事 乳母の女房身投ぐる事)がそのまま持ちこまれて第二十章段が形作られている。

国会本では、頼朝義経不快の部分は第109句末尾に位置しているが、斯道文庫本では110句副将の冒頭に位置している。天草版平家第二十章段は、斯道文庫本の形態に一致していることになる。なお高野本では、卷第十一文之沙汰の末尾に頼朝義経不快の内容が置かれている。

また第二十章段に続く第二十一章段(大臣殿の東下り、同じく帰路の道でくびをはねられ、京中を渡されたこと)の省筆の様子もみておくことにする。

第二十一章段は、国会本からは第111句大臣殿最後、第112句重衡の最後、2句の内容をとりこんでいる。第111句大臣殿最後では、大臣殿父子関東下向 関東たたる事 上人の説法 大臣殿最後 右衛門督最後 大臣殿父子首渡しと、冒頭から続く6小題目すべてを持ちこんでいる。ところがこれに続く第112句重衡の最後では、7章題目(重衡南都へ渡さるる事 北の方参会 同じく離別の事 重衡処刑僉議 阿弥陀供養 重衡最後 北の方出家)の中でとりいれられるのは、次のものである。

重衡もそののち南都え引き渡されて、ついに切られてござる。

これのみが第二十一章段末尾に位置している。重衡に関しては第十一章段(重衡都を渡されて

後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと＝国会本第92句屋島院宣＋第93句重衡受戒）および第十二章段（重衡のあずま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰＝国会本第94句重衡東下り）では、古典平家の内容をすべてそのまま持ちこんでいる。

以上みてきたように第十八章段には、第103句＋第104句＋第105句の3句がとりこまれるが、第104句壇の浦の省筆の妙が注目される。同じように第十五章段、第二十章段および第二十一章段においても、古典平家から2句ずつとりこむ形態をとるが、一方の句の省筆が各章段の輪郭を鮮明にみせる結果となっている。国会本にしたがって、それぞれの語る内容はとりこむが、省筆の妙によって天草版平家の特色をみせることになっている。

⑧登載章段の内容

① 天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんでいない の観察結果から、天草版平家は古典平家の各章段から万遍なく内容を取りあげているのではなく、編者の意図のもとに取捨選択が行なわれていることをみてきた。

さて登載章段の内容を吟味するために、天草版平家への登載章段名のみを整理して記すと、次のようになる。

天草版平家 巻第四	古典平家（国立国会図書館蔵本）巻第八～巻第十二		
第一	第80句義経熱田の陣		
第二	第81句宇治川		
第三	第82句義経院参		
第四	第83句兼平		
第五	兼平		
第六	第84句六箇度のいくさ	第85句三草山	
第七	第86句熊谷・平山一二の駆		
第八	第87句梶原二度の駆	第88句鶴越	
第九	第89句一の谷		
第十	第90句小宰相身投ぐる事		
第十	第91句平家の一門首渡さるる事		
第十一	第92句屋島院宣	第93句重衡受戒	
第十二	第94句重衡東下り		
第十三	第95句横笛	第96句高野の巻	
第十四	第97句維盛出家	第98句維盛入水	
第十五	第99句池の大納言関東下り	第100句藤戸	
第十六	第101句屋島		
第十七	第102句扇の的		
第十八	第103句讒言梶原	第104句壇の浦	第105句早鞆
第十九	第106句平家一門大路渡し		
第二十	第109句鏡の沙汰	第110句副将	
第二十一	第111句大臣殿最後	第112句重衡の最後	
第二十二	第113句大地震		
第二十三	第114句腰越	第115句時忠能登下り	

第二十四	第116句堀川夜討
第二十五	第117句義経都落ち
第二十六	第118句六代
第二十七	第119句大原御幸
第二十八	第120句断絶平家

この巻第四全28章段（実質、29章段）は、語られる内容によって大きく2区分されていると言える。

第1区分（冒頭～第九章段）は、主として木曾義仲の動向（第一章段～第五章段）を語る部分。国会本4章段分を含む。および源義経の動向（第六章段～第九章段）を語る部分。国会本6章段分を含む。義経の動向はさらに、第十六章段～第十八章段：国会本5章段分を含む。および第二十四章段・第二十五章段（国会本2章段）におよぶ。したがって第1区分は、木曾義仲・源義経の敗北への過程を語ることになる。

第2区分（第十一章段～第二十八章段：ただし上記の義経の動向を語る五章段分を除く）は、平家の人々の動向を語る部分。国会本20章段分を含む。その内容は次の通りである。重衡の動向は第十一章段および第十二章段（国会本3章段分）維盛の動向は第十三章段～第十五章段（国会本6章段分）宗盛の動向は第二十章段および第二十一章段（国会本4章段分）建礼門院の動向は第十九章段、第二十二章段、第二十三章段および第二十七章段（国会本5章段分）六代の動向は第二十六章段および第二十八章段（国会本2章段分）したがって第2区分は、平家断絶への過程を語ることになる。

また第2区分に準ずるが第十章段（通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと）および第十章段（正確には第十一章段とある所。誤り。都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰）の2章段、通盛の北の方、維盛の北の方の詳述も注目される。

以上をみると巻第四の主題は、次の2点と言える。

I 木曾義仲・源義経敗北への過程（第1区分）

J 平家断絶への過程：重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向（第2区分）

登場人物がそれぞれに滅亡へと向かうのを語りおえるのが天草版平家巻第四（全28章段、実質29章段）である。

このように全体を2区分仕立てにしている巻第四の構成上の特徴を、木曾義仲を代表させて簡潔に記してみたい。

天草版平家巻第四が国会本第81句宇治川（巻第九）から起されるのではなく、第80句義経熱田の陣（巻第八）から始まることがまず注目される。

国会本第80句義経熱田の陣は、義仲悪行 公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事 の6小題目から成り、これをもって国会本は巻八が終る。この6小題目の冒頭、義仲悪行のみをとりこみ、第79句法住寺合戦とともに一章

段をなしたのが、天草版平家巻第三第十三章段（木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと）である。後の5小題目は巻第四第一章段（頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味しようとかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと）へ移行している。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させ、巻第三の最終章段には「義仲悪行」のみをとりこむという構成の組替えは、編者不干ハビヤンの編纂姿勢が窺われるところである。

第一章段の題目中に「木曾が悪業」として登場する義仲は、第四章段（木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと）の結末が予告されていることになる。国会本第80句義経熱田の陣を、天草版平家巻第三終尾（第十三章段）と巻第四第一章段に2分し、『天草版平家物語』の筋立ての単純化・内容把握の容易さを工夫した不干ハビヤンの構成力がみごとである。

また国会本第83句兼平が、天草版平家では第四章段（木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと）と第五章段（樋口の次郎、降参して後に切らるること：同じく茅野が討死のこと）に、2章段仕立てになっていることも注目される。国会本第83句兼平は、河原合戦 義仲都落ち 浜いくさ 巴のいくさ 義仲最期 兼平最期 樋口の次郎帰洛 茅野の太郎光弘討死 樋口の次郎降人 摂政還住 樋口斬られ 義仲敗亡の輪 の12章題目から成り、第五章段は「樋口の次郎帰洛」から始まる。

以上の木曾義仲に対する語りの工夫は、編者不干ハビヤンの、義仲に対する同情が丁寧な叙述となったものと思われる。

◎不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

最初に登載章段の内容を吟味した際に、天草版平家への登載章段名のみを整理したのにならい、ここでは不登載章段の内容を吟味するために、天草版平家への不登載章段名・不登載小題目をまず記すことにしたい。不登載章段は、第107句剣の巻上、第108句剣の巻下の2章段であるが、第109句鏡の沙汰を準ずるものとして加えたい。「鏡の沙汰」からは章段末尾の小題目：頼朝義経不快のみが、第二十章段に第110句副将とともにとりこまれている。構成上の面からみれば「頼朝義経不快」は、斯道文庫本のように110句副将の冒頭に位置させることが望ましい。天草版平家第二十章段は、冒頭に「頼朝義経不快」+第110句副将となり、斯道文庫本の形態に一致していることになる。

天草版平家巻第四	不登載章段	不登載小題目
	第107句剣の巻上	天地開闢 素戔鳴大蛇を斬らるる事 草薙の起り 熱田の起り 宝剣の因縁

第二十	第108句剣の巻下	源家二つの剣 宇治の橘姫 渡辺の源四郎綱鬼切る 事 頼光蜘蛛切り 安倍の貞任・宗任成敗の事 為 義源家相続 友切の起り 保元平治の乱源氏凶運 頼朝・義経源家再興 曾我夜討の事
	第109句鏡の沙汰	天の岩戸の事 紀伊の国日前像の起り 内侍所炎上 のがれ給ふ事 神楽弓立の宮人 二見の浦の鏡 神 璽の沙汰

天草版平家に持ちこまれなかった第107句・第108句および第109句の冒頭部分を記しておく。

・第107句剣の巻上

神代よりつたはれる二つの霊剣あり。「十握の剣」「叢雲の剣」これなり。十握の剣は、素戔鳴尊大蛇を切り給ひてのち、「天の蠅切の剣」と名づけらる。大和の国石の上布留の社にこめられたり。叢雲の剣は、のちに「草薙の剣」と号す。内裏にありて御守りたりしに、この度長く沈みて見えず。

・第108句剣の巻下

源家に二つの剣あり。「膝丸」「鬚切」と申しけり。人皇五十六代の帝、清和天皇第六の皇子、貞純の親王と申したてまつる。その御子経基六孫王。その嫡子多田の満仲、上野介たりしとき、源の姓を賜はって、「天下の守護たるべき」よし、勅詔ありければ、まづよき剣をぞもとめられける。

・第109句鏡の沙汰

神代より三つの鏡あり。「内侍所」と申したてまつるはその一つなり。昔天照大神、天の岩戸を閉ぢて、天下暗闇とならせましませしとき、よろづの神たち集まつて、「こは、いかがすべき」とて、はかりごとを思ひまうけ、櫛の御四手をささげ、御神楽を奏し給ひしかば、天照大神、岩戸を細めに開かせ給ひて、御覧ぜられしとき、

これらの冒頭記述から明らかなように、天草版平家第四から排除されているのは、皇位の象徴とされる八咫鏡（内侍所）・八坂瓊曲玉（神璽）・草薙剣（宝剣）の三種の神器について語るものである。

ところが巻第四において、「内侍所」「宝剣」「神璽」がみられる。これらの語句が出現する個所をあげてみる。

○第十一（重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと＝第92句屋島院宣一院宣）

・大臣殿時忠卿え勅定の趣を条々申しくだされ、母の二位殿にも細かにを文をもってま一度御覧ぜられうと思し召されば、内侍所のを事よくよく仰せられいと、書かれた。

・（二位殿）何のやうかあらう？ はや内侍所かえし入れ奉って、重衡たすけてを見せあれ：

・（人々）帝王のを位をもたせらると申すわ、ひとえに内侍所の故ぢや：

○第十八（義盛教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平

家の一門ことごとく亡びられたこと＝第105句早輶―先帝・二位殿御最後)

- ・二位殿まづ先帝を抱き奉りを身に二所までくくりつけ、宝剣を腰にさいて、神璽を脇ばさみ、練袴のそばを高くさしはさみ、

○第十九 (平家の生け捕り都え入って渡さること:同じく建礼門院のこと＝第106句平家一門大路渡し―西国より早馬)

- ・去んぬる三月二十四日の卯の刻に壇の浦赤間が関のあたりで平家をついに攻め落し、内侍所、神璽をも参らす:

このように平家物語を語るに必要な「内侍所・宝剣・神璽」は、排除されることがない。以上の三種の神器が述べられる箇所・排除される箇所を、表にしてまとめておくことにする。

天草版平家巻第四	内侍所・神璽・宝剣	
	登載章段	不登載章段
第十一 十八 十九	第92句屋島院宣 院宣 内侍所 第105句早輶 先帝・二位殿御最後 宝剣・神璽 第106句平家一門大路渡し 西国より早馬 内侍所・神璽	* ¹ 建礼門院捕はれ * ² 宝剣神鏡始末 第107句剣の巻上 第108句剣の巻下 第109句鏡の沙汰

*¹ (平大納言時忠の卿)「あな、あさましや。あれは内侍所と申す、神にてわたらせ給ふものを。凡夫は見たてまつらぬことを」

*² 内侍所、鳥羽殿に着かせ給ふ。

波の上に浮かびたる神璽は、片岡の太郎親経が取りあげて、判官に奉るとかや。

宝剣は長く沈みて見え給はず。(中略)天神地祇幣帛をささげ、大法、秘法を修せられけれども験なし。龍宮に納めてんげるやらん。そののちはいまだ出で来ず。

さいごに登載章段の中の不登載小題目を表にしてまとめておく。筋立てに直接拘わりを持たないものは、有名な逸話であっても省略されている様子を見ることができる。

天草版平家巻第四	登載章段	不登載小題目
第五 第六	第83句兼平 第84句六箇度のいくさ	摂政還任 義仲敗亡の論 西の宮のいくさ 和泉の国吹飯の浦のいくさ 備前の国今来の城のいくさ 福原除目
第九	第89句一の谷	後藤兵衛後日 師盛討死 経正・経俊・清房・清定・業盛討死 知章最後 河越黒の沙汰
第十 第十三	第90句小宰相身投ぐる事 第96句高野の巻	通盛夫婦の歌の沙汰 維盛高野参詣 延喜の帝御衣を高野に送らるる事 大師帝の御返事
第十四	第98句維盛入水	那智籠りの僧・維盛見知り奉る事 維盛卒都婆の銘

第十五	第99句池の大納言関東下り	崇徳院神廟
	第100句藤戸	源氏室山の陣 平家児島の陣 佐々木三郎瀬踏み 都に大嘗会行はるる事
第十七	第102句扇の的	牟礼・高松の陣
第十八	第103句讒言梶原	住吉鎭の奏聞の事
	第104句壇の浦	梶原船のいくさ 遠矢の沙汰 源氏の船の中に白旗きたる事 晴延陰陽師ことわざの事
第十九	第106句平家一門大路渡し	宝剣神鏡始末 二の宮御迎へ 頼朝二位に叙せらるる事
第二十	第109句鏡の沙汰	天の岩戸の事 紀伊の国日前像の起り 内侍所炎上のがれ給ふ事 神楽弓立の宮人 二見の浦の鏡 神璽の沙汰
第二十一	第112句重衡の最後	北の方参会 同じく離別の事 重衡処刑僉議 阿弥陀供養 北の方出家
第二十二	第113句大地震	文徳の御時の地震 朱雀の御時の地震
第二十三	第114句腰越	申し状
	第115句時忠能登下り	頼朝文覚招請 義朝菩提院建立の事
第二十五	第117句義経都落ち	吉田大納言経房 三郎先生討手の事

Ⅲ 総括

『天草版平家物語』（大英図書館蔵本・1592年＝文禄元年，イエズス会天草学林で刊行。不干ハビヤン編集）の原名は，“NIFON NO COTOBATO Historia uo narai Xiran to FOSSVRV FITO NO TAMENI XEVA NI YAWARAGETARV FEIQQE NO MONOGATARI”である。外来宣教師（主としてポルトガル人）のための日本語テキストであり，本文はポルトガル語式のローマ字綴によって表記されている。VM.（右馬の允）とQ1.（喜一検校）の対話体によって「平家の由来が大略わかるように」語られてゆくものである。

本稿は，古典平家（国会本）と比較対照を行ない，『天草版平家物語』巻第四（全28章段，実質29章段）の構成を明らかにしようとするものである。天草版平家巻第四の内容は，国会本巻第八（第80句）～巻第十二に相当している。

両者の対校表を作り，その観察から次の3点に注目した。これは巻第一・巻第二および巻第三にも共通する観察点である。

①天草版平家は，古典平家の内容をそのままに持ち込んでいない（古典平家の各章段と1対1の関係を持っているわけではない）

②登載章段の内容

③不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

これらの注目点の要旨を，箇条書として記しておく。

1. 天草版平家巻第四は，質量ともに他の巻とは異なり，古典平家（国会本）から持ち込んで

いる内容が多く見られる。したがって国会本巻第八（第80句）から巻第十二（第120句）までを集約したものと言える。

2. 集約した内容の主題となるのは、次の2点である。

I 木曾義仲・源義経の敗北への過程

J 平家断絶への過程（重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向）

源氏方（義仲・義経）・平家方（重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代）ともに滅びへの動向が語られる。

3. 第十八章段（義盛教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと）は、国会本から3章段分の内容をとりこんでいる。このように天草版平家一章段に、古典平家（国会本）から3章段（第103句讒言梶原＋第104句壇の浦＋第105句早頼）分を持ち込んでいるのは、この第十八章段のみである。内容は、平家滅亡への過程を語るものである。

・第十八章段で注目されるのは、省筆の技である。国会本3句、3様に、それぞれの持ち込み方をみせている。国会本からとりこむ内容採択と比重のおき方に省筆の妙がある。

・省筆の技がみられるものに、次の章段がある。

第十五章段＝第99句＋第100句

第二十章段＝第109句＋第110句

第二十一章段＝第111句＋第112句

天草版にとりこむ形態として、一方の句における大幅な省筆が、章段の輪郭を鮮明に見せる結果となっている。：④

5. 巻第四全28章段（実質29章段）は、語られる内容によって大きく2区分される。

第1区分 木曾義仲（第一章段～第五章段）・源義経（第六章段～第九章段＋第十六章段～第十八章段＋第二十四章段・第二十五章段）敗北への過程

第2区分 平家断絶への過程（第十一章段～第二十八章段：ただし上記義経の動向を語る5章段分を除く）

登場人物それぞれが、滅亡へと向かう過程を語りおえるのが天草版平家巻第四（全28章段、実質29章段）である。：⑤

5. 構成上の注目すべき工夫は、巻第四第一章段にある。

・国会本第81句宇治川から天草版平家巻第四が起されるのではなく、第80句義経熱田の陣から始まる。

・この第80句は、冒頭小題目義仲悪行のみを巻第三第十三章段（木曾都において狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと）へ持ち込み、後の5小題目（公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事）を、巻第四第一章段（頼朝木曾が悪行を

聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範義と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしようとかいをはたてたれども、平家同心せられなんだことへ移行させている。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させるという構成の組替えは、編者不干ハビヤンの大胆さ・緻密さに裏付けられるものである。日本語テキストとして、文学性の理解を助ける筋立ての簡潔さ、内容把握の容易さを意図したものと思われる。

6. 不登載章段は、第107句剣の巻上、第108章段剣の巻下の2章段であるが、第109句鏡の沙汰も不登載章段に準ずるものである。

・皇位の象徴とされる八咫鏡（内侍所）、八坂瓊曲玉（神璽）、草薙剣（宝剣）の三種の神器について語るものは、天草版平家の排除の対象となる。しかし、平家物語を語るに必要な「内侍所」「宝剣」「神璽」は、排除されない。：◎

7. VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ。

Q1. やすいこととござる。をうかた語りまらしょうず。として語られる『天草版平家物語』の巻ごとの主題を記しておく。

巻第一 A 平家一門の威勢繁栄

B 平家悪行の始め（殿下乗合）

C 鹿谷事件

巻第二 D 祇王

E 高倉宮以仁王の事件

F 源頼朝の挙兵

巻第三 G 木曾義仲の動向

H 平家一門の動向

巻第四 I 木曾義仲・源義経の敗北への過程

J 平家断絶への過程（重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向）

参考図書

『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』江口正弘 明治書院

新潮日本古典集成『平家物語』水原一校注 新潮社

『天草版平家物語の語法の研究』鎌田廣夫 おうふう

『平家物語全注釈』富倉徳次郎 角川書店

『天草版平家物語私考』市井外喜子 新典社

(2003年9月22日受理)